

2011 - 2012 スペシャルクリニック

第1回

開催日：2012年3月3日(土)

会場：大阪商業大学 521教室

講師：JBA男子日本代表チーム コーチ 東野 智弥 氏

テーマ：世界のバスケットボールを知るコーチから学ぼう

男子アルゼンチンバスケットボールから学ぶ強化・普及

東野氏が現在の男子日本代表チームにコーチとして関わる上で、純粋に「日本のバスケットボールをメジャーにしたい」、「日本のバスケットボールを強くしたい」という思いから近年、急速に力をつけているアルゼンチンに単身で渡り、アルゼンチンの男子バスケットボールにおける発掘・育成・強化・普及というシステムを現地にてインタビュー及びアンケートという形態で調査した内容が報告された。

アルゼンチン男子バスケットボールの歴史として1985年にLNBという国内リーグがスタートする。1952年以来オリンピック出場の機会は遠ざかるが、夏季オリンピックにおいては2004年に優勝、2008年には3位、世界選手権においては2002年に準優勝、2006年に4位と輝かしい実績を残すまでになった。今ではNBAで活躍するルイス・スコラやエマニュエル・ジノビリといった著名な選手を輩出している国であることは言うまでもない。それでは、なぜアルゼンチンの男子バスケットボールが成功することができたのか、その要因について具体例が示された。

アルゼンチンは、スペイン語を公用語として持ち、総人口、バスケットボール競技登録者数とも日本の約3分の1で、何といてもサッカー大国である。

その中で年代別に8つのカテゴリーに分類され、試合数を確保している。15歳よりフィジカルトレーニングを推奨し、カテゴリー間における飛び級制度も設けている。若年層では、週における練習回数、練習時間とも日本よりは短く、自主的な練習と試合において個人の能力を高めることに重点をおいている。

ミニの世代では調整力、U-13では判断力、U-15では筋力トレーニングというようにU-19で育成期間を終了する。またU-13の練習ではスクリーンを使ったオフェンスシステムを多用し、この世代から知識体力をつける訓練を日頃から行い将来的にプレーの引き出しを多く持てるようにという説明であった。ボールについても5号球から7号球へと、日本の中学生が使う6号球を介さず、全てにおいてシニア向けハードにプレーしていくことを強調された。このように、徹底した早期からの育成プログラムを実践し、リーグにおいては選手、コーチ、審判が連携し、最終的にクラブ、リーグ、連盟が全体的に競争している構図になる。常にベクトルを世界に向けたアルゼンチン特有のシステムである。尚、連盟は外国人コーチを採用する基準を独自で設定した結果、現在では国内における外国人コーチはいない。それだけ自国における豊富な知識を持つコーチが多いということになる。

これまで東野氏のアルゼンチン男子バスケットボールに関する調査結果の概要を記述してきたが、日本におけるシステムの現状はどうであろうか。本講習に参加している我々はJBA(日本バスケットボール協会)という組織の中にある各都道府県協会(大阪バスケットボール協会)の公認コーチである。ミニ、中学校、高校、大学、実業団、クラブチーム、家庭婦人と所属連盟の違いはあるが、足並みを揃えて日本の育成・強化・普及に協力していくしかないのではないかと感じた。日本での男子バスケットボールはプロ化を進める上でのJBLとbjリーグの2リーグ制の問題、少子化による競技人口減少の問題等、残されている課題はあるが、スラムダンク人気で日本のバスケットボールを終わらせることなく、アジアから世界を見据えたJBAの方針を貫いて欲しいと感じた。長らく日本の男子バスケットボールはアジアの壁に阻まれ低迷しているが、一歩ずつ先に進み、いつの日かアジアの頂点に立ち、オリンピックに出場する日を期待したい。今回は、なかなか機会をもつことができない現役のナショナルチームのコーチより講話をいただくことができ有意義であった。